



三邊 正人 先生

### 略歴

- 1981年 神奈川歯科大学卒業 同、保存第2講座（歯周）助手
- 1990年 奥羽大学歯学部保存第1講座（修復・歯周）講師
- 1994年 文教通り歯科クリニック（千葉市）開業
- 2014年 神奈川歯科大学大学院歯学研究科口腔科学講座歯周病学分野教授
- 2017年 同口腔統合医療学講座歯周病学分野教授 同付属病院医科歯科連携センター長

歯学博士，日本歯周病学会理事，指導医，専門医 日本歯科保存学会理事，指導医  
日本口腔インプラント学会専門医，日本抗加齢医学会専門医 日本口腔検査学会理事，認定医  
日本糖尿病学会会員

## 歯周医学に基づいた歯科医科連携診療における口腔・腸細菌叢情報の活用

神奈川歯科大学大学院歯学研究科 口腔統合医療学講座 歯周病学分野  
三邊 正人

バイオフィーム感染症である歯周病は，全身との関連性からは，非感染性疾患（NCD）と認識されるようになってきた。疾病負荷（経済的コスト，死亡率，疾病率で計算される特定の健康問題の指標）の概念に基づいて全身の健康を鑑みて口腔の慢性炎症と機能の改善を図ることが歯周治療においても重要となっており，それを反映した歯周病の新分類も臨床に導入されつつある。すなわち，リスク検査⇒リスク診断⇒リスク低減治療⇒リスク管理という慢性疾患における医科モデルに準じたTreat to Target（複数の治療のエンドポイントで疾患を病状安定状態に管理する考え方）の原則に基づいた歯周治療体系の構築が必要である。「歯周医学に基づいた歯科医科連携診療」を行う上で歯科医科共通の臨床指標（炎症，感染，機能，破壊進行度）が必要である。炎症指標としては，歯周ポケット内炎症面積（PISA）や高感度CRPが，機能指標としては，咀嚼能や咬合力検査，破壊進行度の指標としては，骨吸収年齢比などが有用と考えられている。一方，感染指標としては，歯周病原細菌検査や抗体価検査に加えて，口腔内のフローラ検査が有用と考えられている。腸内フローラと全身疾患の関連性については，多くのエビデンスが集積されつつある。消化管の入り口である口腔と出口である腸のフローラの関連性や，口腔のフローラの意義についても国内外で精力的な研究がなされているが，臨床研究に関しては，これからの状況である。本講演では，口腔内細菌（叢）と全身疾患に関する知見やそれに関連する医科歯科連携事例を紹介した上で，当大学病院の医科歯科連携センターで集積してきた口腔内（唾液）と腸内フローラのデータを基に，口腔内・腸内細菌叢情報の今後の活用について考えてみたい。

全身の健康リスクのコントロールに口腔内と腸内の細菌叢情報を考慮した歯周病の個別化したリスクコントロール法が先制医療（Precision medicine）として社会的に認知されて初めて歯科医科連携した総合診療（Comprehensive medicine; あらゆる臓器が有機的に関連するという総合的視点に基づいた診療）が可能となることを，まず，医療従事者間で共有することが必要である。